

トーマス・ヴィーツェンマンと汎神論論争（1）

後 藤 正 英

Thomas Wizenmann and the Pantheism Controversy Part 1

Masahide GOTO

要 旨

トーマス・ヴィーツェンマン（Thomas Wizenmann, 1759-1787）は、一般的には決して著名な存在とはいえないが、ヤコービとメンデルスゾーンの間で発生した汎神論論争の哲学的争点を明確化し、汎神論論争に対するカントの主張を引き出すうえで隠れた影響力をもった人物であった。この点に注目した先行研究としては、フレデリック・バイザーの『理性の運命』がある。この論文では、バイザーの指摘を踏まえながら、ヴィーツェンマンが汎神論論争にどのような貢献を行ったのかという問題について明らかにしたい。特に論者の関心は、晩年のメンデルスゾーンのコモン・センスとヤコービの信仰の間には、真理の試金石を狭義の理性を超えたところに求める点で共通点があるのではないか、という問題提起をヴィーツェンマンがおこなったところにある。本稿は、論文全体の第一部を成すものである。最初に、ヴィーツェンマンの略歴を紹介し、次いで、ヴィーツェンマンによる批判の要点を確認するための準備作業として、『朝の時間』でのメンデルスゾーンのコモン・センス論を紹介したい。

はじめに

トーマス・ヴィーツェンマン（Thomas Wizenmann, 1759-1787）は、一般的には決して著名な存在とはいえないが、ヤコービとメンデルスゾーンの間で発生した汎神論論争の哲学的争点を明確化し、汎神論論争に対するカントの主張を引き出すうえで隠れた影響力をもった人物である。ヴィーツェンマンは、宗教的感性と哲学的才能に恵まれた人物であったが、27歳の若さで夭折した。ヴィーツェンマンは、ピエティズムの信仰をもつ者として啓蒙主義の思潮と対決し、彼の親友のヤコービと近似した問題設定を立てながらも、ヤコービとは違ってキリスト教と密接な関係を保ちながら¹、合理主義の哲学と歴史的宗教の対立関係を先鋭化させる議論を展開した。

ヴィーツェンマンは、ヤコービの『スピノザ書簡』（1785）の刊行の翌年の1786年に『ある篤志家によっ

佐賀大学 文化教育学部 欧米文化講座

¹ かつては、ヤコービの哲学に対しては「信仰哲学 Glaubensphilosophie」という名称が与えられていた時代もあったが、ヤコービの Glauben は信仰というよりは信念や確信と呼ぶべきものであり、彼の哲学を単純な意味でキリスト教信仰にもとづく哲学として理解するのは不正確である。

て批判的に考察されたメンデルスゾーンとヤコービの哲学の結末。誰がではなく何が?』(以下、『結末』と略記)²を刊行することで、ヤコービに近い立場から、汎神論論争における議論の進展に一石を投じるようになった。カントは『思惟において方向を定めるとはいかなることか』(1786年。以下、『方向性論文』と略称)では、ヴィーツェンマン、ヤコービ、メンデルスゾーンを意識したうえで、自らの立場を明確化している。カントの『実践理性批判』(1788年)が、この『方向性論文』の後に出版されたものであることも併せて考えるなら、カントの実践的理性信仰の立場は、汎神論論争を意識することで、その輪郭がより鮮明なものになったのだ、といえるだろう。当初『結末』は匿名で出版されたため、ヘルダーの著作ではないかとの推測もなされていた。カントは、『方向性論文』では、『結末』の著者を知らない状態でこの著作の意義について言及している。1787年になって、ヴィーツェンマン自身が、ヤコービとヴィーラントが共同で編集していた雑誌『ドイチェス・ムゼウム』に「カント教授に寄せて『ヤコービとメンデルスゾーンの哲学の結末』の著書より」を掲載することで、『結末』の著者としてヴィーツェンマンの名前が広く世間に知られることとなった。後にカントは『実践理性批判』弁証論において、次のような言葉を残している。「『ドイチェス・ムゼウム』1787年2月号に、きわめて繊細かつ明晰な頭脳の持ち主であり、早世が惜しまれる故ヴィーツェンマン氏の論文が載っている」(V 143)

ところで、そもそも論者がヴィーツェンマンに興味をもった理由は、汎神論論争に関するスタンダードな研究書として知られているフレデリック・バイザー (Frederick Beiser) の『理性の運命』の中で、わざわざ紙数を割いてこのマイナーな哲学者への言及が行われていたことにある³。

言うまでもなく、汎神論論争とは、啓蒙主義時代のドイツを代表する文人であったレッシングの死後に、晩年のレッシングが当時は危険な無神論の代名詞であったスピノザ哲学の信奉者であったのかどうかという問題をめぐって、ヤコービとメンデルスゾーンの間で巻き起こった論争である。これは、スピノザのみならず、当時の支配的な哲学であったライプニッツ・ヴォルフ哲学をも含めたうえで、啓蒙主義哲学の有効性をめぐって展開された論争であり、特に、ヴォルフ流の合理主義的な哲学体系が現実存在を把握できるのかという問題が、哲学と信仰の関係という対立図式を通して議論されていた。結果的には、この論争は、啓蒙主義哲学からドイツ観念論への思潮の転換をうながす原動力としての役割を果たすことになった。

バイザーはヴィーツェンマンの議論が汎神論論争にもたらした貢献の内容について、次のように指摘している⁴。第一には、ヴィーツェンマンがメンデルスゾーンとヤコービの間の相違点と共通点の双方を明確化した点にある。つまり、晩年のメンデルスゾーンがコモン・センスを重視している点に着目することで、メンデルスゾーンには単なる合理主義者に尽きない側面があることを指摘したのである。第二には、『スピノザ書簡』の出版後に非合理主義者のレッテルを貼られていたヤコービに対して正当な位置づけをおこなった点にある。ヤコービの議論の出発点が単なる非合理主義ではなく哲学的合理性の徹底化にあることを指摘する議論であったといえる。第三には、汎神論論争を、個人的な人間関係の確執から理解するのではなく、あくまで哲学的問題の事柄自体から理解する方向性を示した点にある。実際、ヴィーツェンマンが『結末』を匿名で出版した理由は、公平な立場から論争に焦点を当てるためであった。サブタイトルにある「篤志者 (Freiwillige)」も、著者が党派的ではなく自発的な立場にあることを示しており、「誰がではなく何が? (Non quis? sed quid)?」とは、誰が議論をしているのかではなくて、どのような哲学

² 原文タイトルは以下の通りである。“Die Resultate der Jacobi'schen und Mendelssohn'schen Philosophie, kritisch untersucht von einem freiwilligen. Non quis? sed quid?”

³ Frederick C. Beiser, *The Fate of Reason, German Philosophy from Kant to Fichte*, Harvard University Press, 1987.

⁴ Ibid. pp.109-110.

的問題が取り上げられているのかが重要であることを示すものであったといえる。

以上のバイザーの指摘の中で論者として最も興味を惹かれるのは、ヴィーツェンマンが、晩年のメンデルスゾーンのコモン・センスの立場とヤコービの信仰の立場には共通する点があるのではないか、という問題提起をおこなった点である。この問題は、もちろんヴィーツェンマン自身の固有の立場を理解するうえで重要な意味をもつだけでなく、カントが、ヴィーツェンマンに刺激される形で、どのように独自の実践理性信仰の立場を形成したのかを知る意味でも、重要な示唆を与えるものである。

本論の目的は、バイザーの指摘を踏まえながら、ヴィーツェンマンの議論が汎神論論争にどのような貢献を行ったのかという問題について追跡するところにある。その過程で、理性や信仰などの哲学的語彙をめぐる各論者の見解の相違や誤解も明らかになるだろう。本稿は、論文全体の第一部として、最初にヴィーツェンマンの略歴を概観した後で、ヴィーツェンマンによる批判の要点を確認するための準備作業として、メンデルスゾーンのコモン・センス論を紹介したい。

1 トーマス・ヴィーツェンマンの略歴

トーマス・ヴィーツェンマンは1759年11月2日にルートヴィッヒスブルク（シュトゥットガルト近郊の町であり、現在はバーデン＝ヴュルテンベルク州に属する）で織物職人の子として生まれた⁵。両親はピエティズムの信仰をもつ人物であり、ピエティズムはヴィーツェンマンに対して生涯に渡って大きな影響力を持ち続けた。ヴィーツェンマンはルートヴィッヒスブルクのラテン語学校では、同じ年齢のシラーと一緒にラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語等の授業を受けていた。その後、1775年に、まだ15才になる前に、いわゆる Famulus (Stipendiat とは異なり、神学校内部の雑務をこなしながら授業を受講する研修生) としてテュービンゲンの神学学校に入学した。当初は哲学のみを履修していたが、後に父の希望であった神学の勉強も開始することになった。テュービンゲンでは最初はシュトールから、後に Plouquet から教えを受けた。この時期、ヴィーツェンマンは、ピエティストとの交流や、エッティンガー、ベンゲル、ヘルダー、ラーヴァターといった人々の著作に親しむことで、宗教心を深めることになった。ヴィーツェンマンは、エッティンガーの著作から聖書の哲学思想を学び、ラーヴァターやヘルダーからは歴史を学んだ。1779年になると、神学試験の許可を得る前に、ノルトヴェルトハイムの牧師ハラーのもとで彼の子供たちの勉強を見ながら寄宿生活を始めることになった。1780年には神学試験に合格し、同年にはエッシンゲンの牧師職に着いたが、1783年にはバルメンのジーベル家の家庭教師へと転職した。エッシンゲン時代には、既にメンデルスゾーンの哲学を学んでおり、メンデルスゾーンの『フェードン』を論駁したいとの希望を語っている。ヴィーツェンマンにとって、メンデルスゾーンは合理主義哲学の代表者であり続けた。

ヤコービとヴィーツェンマンの親交は1783年の夏に開始された。バルメンへの旅の途中でデュッセルドルフに立ち寄った際に、ヴィーツェンマンの『人類を介したサタンの神的発展』（1782）を高く評価していたヤコービから招待を受けたことが二人の交友関係の出発点となっている。ヴィーツェンマンは、ヤコービとの親交を深める中でスピノザの哲学を知るに至り、神の現存在と聖書の言葉に対する懐疑の気持ちを強めることになった。それが彼をしてスピノザとレッシングの著作群の研究へと向かわせることになった。ヴィーツェンマンは、ヤコービとの対話を続ける中で、メンデルスゾーンとヤコービの論争に対する

⁵ ヴィーツェンマンの略歴については簡略なものとしては以下のものがある。Heinze, Max, „Wizenmann, Thomas“, in: Allgemeine Deutsche Biographie (1898), S. [Onlinefassung]; URL: <http://www.deutsche-biographie.de/pnd139109463.html?anchor=adb> ヴィーツェンマンの生涯についてはフライヘーアの著作が基本文献である。Alex. Freiherr v. d. Goltz, *Thomas Wizenmann, der Friedrich Heinrich. Hn. Jacobi's, in Mittheilungen aus seinem Briefwechsel und handschriftlichen Nachlasse, wie nach Zeugnissen von Zeitgenossen*, 2 Bde., Gotha 1859.

彼自身の独自の立場を見出すようになり、神の現存在に対する懐疑を自分自身の方法で克服するに至る。こうして彼は信仰心を取り戻すに至り、最終的にその成果は『結末』の中に結実するに至った。

しかし、その一方で彼の健康状態は損なわれつつあった。肺の病気のため、ヴィーツェンマンはバルメンでの家庭教師職を辞さざるを得なくなり、ヤコービの好意により、ヤコービがデュッセルドルフ近郊のパンペルフォルトに所有している別荘に滞在し、しばしの病の小休止の中で、思索にふけり知識人たちとの交友を深めることになった。一時期デュイスブルクにも滞在し当地で教授職への打診も受けたが、健康上の理由ゆえに断念し、パンペルフォルトのヤコービのもとへ戻るようになった。『結末』はデュイスブルクから戻った後で執筆された作品である。死の直前にはミュールハイム・アム・ラインに移り、親しい関係にあった医者ヴェーデキントのもとで過ごしていたが、1787年2月22日に当地で死去した。享年27才の若さであった。生前に出版された著作は『人類を介したサタンの神的発展』（1782年）と『結末』（1786年）であり、死後の1789年には遺稿として『歴史の信憑性の自己証明として考察されたマタイによるイエスの歴史』⁶が出版された。

『結末』の出版の経緯について少し詳しく確認しておこう。そもそもスピノザ論争の出発点はヤコービが1780年の7月から8月にかけてレッシングのもとを訪れ複数回に渡る対話を重ねたことにある。その際に、ヤコービはライマールスの娘エリーゼとも親交を結ぶに至った。ヤコービはエリーゼの書簡によってメンデルスゾーンがレッシングの人となりに関する著作の出版を計画していることを知り、エリーゼへの返信の中で、晩年のレッシングが完全なスピノザ主義者であったことを伝えた。その後、その情報に驚いたメンデルスゾーンとヤコービの間で書簡のやりとりが開始する。メンデルスゾーンはレッシングからスピノザ主義者としての汚名をそそぐべく、『朝の時間』を出版することで、スピノザの哲学が有神論と両立する可能性（純化された汎神論）を示そうとした。同時期にヤコービも『モーゼス・メンデルスゾーン氏の書簡におけるスピノザの教説について』（いわゆる『スピノザ書簡』）という、レッシングとの対話とメンデルスゾーンの書簡を収録したスピノザ哲学との対決の書を刊行した。メンデルスゾーンはそれを受けて『レッシングの友人たちへ』（1786年）を出版する。『レッシングの友人たちへ』の出版を急いだことでメンデルスゾーンが体調を崩して急死したことも相俟って、ヤコービは様々な非難にさらされていたが、その後、ヤコービはメンデルスゾーンの『レッシングの友人たちへ』に反論するために、『スピノザ書簡に関するメンデルスゾーンの非難に抗して』（以下、『非難に対して』と略称）を刊行した。ヴィーツェンマンは、レッシングやスピノザ哲学との対決の中で、信仰に関する自らの見解を堅固なものとしたわけだが、その成果が、およそ二か月の間に書かれた書物『結末』として現れるに至った。ヴィーツェンマンはヤコービを驚かすべく『結末』を完成間近までヤコービに伝えることはなかったが、原稿を一読したヤコービはその書に大いに賛同した。ヤコービは『非難に抗して』（1786年）の冒頭部分で、ヤコービに対する誤解を解くうえで重要な意味をもつヴィーツェンマンの著作が出版間近であることを告げている。ここでは、ヤコービは、著者の名前については明かさないままで、その著作が批判的作品であることと、著者が哲学的に一級の人物であることを強調している。「この著作では、私の本当の考えが根本から把握され、驚くべき明瞭さでもって論述されており……私がレッシングとスピノザに関する著作で約束した仕事……私自身が行える状況にあったかもしれない場合よりも優れた仕方で行われている。」（W 275）

ヴィーツェンマンの『結末』は1786年の初夏に刊行された。ヴィーツェンマンは、『ドイツェス・ムゼウム』に掲載されたカント宛ての小論の中で、『結末』を執筆した意図について次のように述べている。「ヤ

⁶ 正式の原文タイトルは以下の通りである。“Die Geschichte Jesu nach dem Matthäus als Selbstbeweis ihrer Zuverlässigkeit betrachtet, nebst einem Vorbereitungsaufsatz über das Verhältniß der israelitischen Geschichte zur christlichen. Ein nachgelassenes Werk von Th. Wizenmann, mit einer Vorrede von Joh. Frdr. Kleuker”

コービの考えをよく知っていること、ヤコービの発言に対してもたらされている誤解、さらには、私には首尾一貫していないように思われるものなのだが、メンデルスゾーン自身の哲学的独断論への自負、そして、哲学と常識に神認識の全てを委ねておきながら、すぐさまユダヤ教を真の神認識の唯一の源泉として称揚する場合のメンデルスゾーンの曖昧さ、しかし何といっても、哲学的独断論を産み出すことができるような全てのものに対して聖書に基づく人類の宗教史が優先していることに関する私の確信、これらの事柄があわさって、私に『結末』を書かせるべく自発的な決断をなさしめるに至ったのである。』

2 晩年のメンデルスゾーンのコモンセンス理解

『結末』の前半は、特にヤコービとメンデルスゾーンからの引用（特にメンデルスゾーンからのものが多く見られる）とそれに対する批判的コメントからなっており、後半では彼独自の立場が展開されている。前半の議論で特に注目すべきは、ヴィーツェンマンによる次の指摘である。ヴィーツェンマンは、メンデルスゾーンが理性以外に真理の根拠は存在しない（「永遠真理に関しては、理性根拠による以外の確信を知らない」（JubA, Bd. 3. 2, 197）と述べながら、他方で理性がコモンセンスによって方向づけられねばならない、と主張している点に曖昧さと矛盾を見出しているのである。

ヴィーツェンマンによる批判を見る前に、メンデルスゾーンの『朝の時間』での議論を確認しておこう。『朝の時間』では、主に第三講や第十講の中で、コモン・センスについての言及が行われている。『朝の時間』では、メンデルスゾーンは、コモン・センスと思弁を対立させたいと、その中間に理性を媒介させる構図を提示している。メンデルスゾーンは、すでに初期の論考において、魂の上位能力と下位能力の調和という思想をもっており、そこでは、上位能力と下位能力の関係は、潜在的な能力が次第に顕在化していく連続的な過程として理解されていた。コモン・センスは、単なる外的感覚として理解されることも多いわけだが、その内部では、すでに理性的なプロセスが進行しているのである。メンデルスゾーンは、コモン・センスも理性も、全く別の能力としてではなく、同じ能力の機能上の違いとして解釈した。この場合、コモン・センスは理性の直観形式であり、思弁は理性の論証形式であることになる。さらに、理性の判断がゆっくりと進行するのに対して、コモン・センスは急いで結論へ到達しようとする傾向があることが述べられている。

メンデルスゾーンは、思弁が犯す誤謬を是正し、理性の軌道修正を行う場合に、コモン・センスによって理性を導かせようとした。これに関連した興味深いエピソードとして、メンデルスゾーンは、『朝の時間』の第十講の中で、自分が昨晚に見た夢の内容を紹介している（JubA, Bd. 3. 2, 81-82）。それは、ちょうど、理性とコモン・センスの関係についてのアレゴリーとなっており、メンデルスゾーンが啓蒙主義の時代が終わりを迎えつつある当時の状況を無意識のうちにどのように感じていたのかを表現した興味深い内容になっている。

以下は、その内容の要約である。夢の主人公（メンデルスゾーン）はスイスの山中を二人のガイドを連れて旅をしている。二人のガイドのうち、一人は女性で、もう一人は男性である。男性は若くて力強い風貌をしているが、繊細な知性に欠けるところがある。女性の方は、痩せていて、終始視線を下に向けながら歩いており、眼には翼のようなものをつけた風変わりな格好をしている。道が二手に分かれる場所までやってくると、男性のガイドの方は、急いで、右の方へ行こうとし、女性のガイドの方は、頭についている翼のようなものを携えて、左の方へ飛んでいこうとする。どちらに従えばいいのか分からなくなって、

⁷ Thomas Wizenmann, *An den Herrn Professor Kant von dem Verfasser der Resultate Jacobischer und Mendelssohnscher Philosophie*. In: Deutsches Museum (1787). S. 116-156.

私たちが道の上に立ちすくんでいると、そのうちに、悠然とした調子で一人の年輩の婦人が近づいてきて、話を始める。婦人は、男性のガイドの方は「コモン・センス (Gemeinsinn, sensus communis)」という名前前で、もう一人の女性の方は「観照 (Beschauung, contemplatio)」という名前であり、二人がけんかしてしまった場合には、自分は仲裁をしているのだ、と語る。さらに、たいいていは男性のガイドが正しいが、たまに、女性のガイドの方が正しいこともある、と語る。

私たちの一人が、婦人の名前を問うと、婦人が答える。「地上では、私は、理性と呼ばれています。天国では・・・」。ここで突如として、恐ろしい騒音が巻き起こり、たくさんの狂信的な人々が、婦人の周りを取り囲んでしまう。狂信的な群集は婦人と男のガイドを追い出して、観照と呼ばれていた女性を取り囲んでしまい、一と、ここで目が覚めるという、というのが夢の内容である。もちろん、ここでの狂信的な群集には、おそらくはヤコービたちが投影されており、ここからは、スピノザ論争に巻き込まれた最晩年のメンデルスゾーンの胸中を伺い知ることができる。

メンデルスゾーンの夢の登場人物は、それぞれ、女性のガイドが「思弁、観照」を、男性のガイドが「コモン・センス」を、年配の婦人が「理性」を体現している。この夢では、年輩の婦人として描かれる理性は、コモン・センスと思弁の間の仲裁役として存在する。理性は、ほとんどの場合、男性のガイドに託して描かれたコモン・センスに付き従おうとする。理性のあやうさをコモン・センスによって補おうとするメンデルスゾーンの見解が、このようなアレゴリーを通して描かれたのである。

さて以上の主張を、当時の論争状況に戻して考えてみよう。メンデルスゾーンにも、理性が思弁のみに依拠することへの批判的視点が存在する。思弁に対する批判的視点は、ヤコービ、カント、メンデルスゾーンの3人に共通する見解である。この場合、ヤコービは、理性と思弁を完全に一体化させることで、神に関するあらゆる哲学的認識を否定した。ヤコービの場合、神すなわち超感性的な対象への通路は、理性(悟性)にではなく、信仰や感情にのみ存在する。しかし、メンデルスゾーンは、思弁と理性を完全に一体のものとは考えず、コモン・センスをガイドとすることで理性を常道へ戻す可能性を探ろうとした。そして、カントはそれを実践理性の問題として理解したのである。

ところで、ここで発生する疑問は、理性的な論証とは別に真理の試金石を想定している点では、ヤコービの信仰とメンデルスゾーンのコモン・センスは実はかなり類似しているのではないか、という問いである。この点を指摘したのがヴィーツェンマンであった。ヤコービとメンデルスゾーンの間の親近性に関するヴィーツェンマンの指摘は、メンデルスゾーンのコモン・センスがヤコービと同じタイプの狂信と理性の放棄に陥る危険性を含みもっていることを、カントに認識させたものと思われる。カントは、超感性的な領域において思惟の方向を見定める試金石が必要であるという問題提起に関しては、メンデルスゾーンと共通する見解をもっていた。しかし、カントは、メンデルスゾーンのように思惟の方向のかじ取りをコモン・センスに委ねるのではなくて、あくまで実践理性の客観的な必要性の問題として理解しようとした。カントは、メンデルスゾーンが考えようとしていた事柄は、秘密の真理感覚ではなくて、実はただ理性だけであったのだ、と述べている (VIII, 134)。『方向性論文』でのカントは、メンデルスゾーンの思惟の方向性をめぐる議論を過渡的な性格をもつものとして位置付けている。繰り返しの指摘になるが、カントは、メンデルスゾーンやヴィーツェンマンと自分の立場の違いを明確化する作業を通して、理性信仰に関する自身の思想を練りあげていったのである。

さて、ヤコービの信仰とメンデルスゾーンのコモセンスの間に類似点があるとしたら、両者の違いはどこからやってくるのであろうか。この点に関して、バイザーの解釈によると、ヴィーツェンマンの解決

⁸ Beiser, pp.111-112.

は、かなりカント的である⁸。ヤコービとメンデルスゾーンの違いは、道徳や宗教的信念に関する正当化の方法にある。メンデルスゾーンはコモンセンスを理論的認識の問題として捉えているが、ヤコービは信仰を意志の問題として捉えている。ヤコービの考えでは、われわれは信仰を、知識によってではなく、正しい心術をもち行為をすることで獲得するのである。

しかし、ここには慎重な考察を必要とする問題群が伏在している。メンデルスゾーンは、一貫して、自らの宗教理解において「信仰 (Glauben)」という言葉を用いることを意図的に避けようとしている。メンデルスゾーンは、Glauben という言葉を信仰箇条に対する強制的信仰を象徴する言葉として理解しており、Zuversicht のような別の言葉で言い換えようとする。もっとも、閉じた論証の体系によっては我々の生のような直接的なものを把握することができないことを主張するヤコービの信仰概念は、まさにドグマ的なものを批判しようとしている点では、用いる言葉は違うとはいえ、或る意味ではメンデルスゾーンと動機としては相通じる部分がある。しかし、メンデルスゾーンが神認識において決して理性を手放すことはない点では、やはり両者の違いも浮き彫りになってくる。

メンデルスゾーンにとって、形而上学における思弁は、悪い意味でのスコラ的な思弁ではなくて、自由な探求精神による活動としての意味をもっている。ここで問題になっているのは、探求の結果として見出される内容よりは、探求の在り方自体、或いは探求を維持する姿勢である。メンデルスゾーンは、信仰という名によって探究を停止してしまうドグマティズムこそを批判する。ここには、ユダヤ教は真理の認識においては徹底して自由である、というメンデルスゾーンのユダヤ教理解が存在する。真理の探求においてドグマティズムを批判する点で、メンデルスゾーンの内部では、ユダヤ教と啓蒙主義のリベラリズムが重なり合うものとして理解されていたように思われる。ヴィーツェンマンはメンデルスゾーンが理性とユダヤ教を同時に保持しようとしている点に矛盾を見出していたわけだが、しかし『結末』の後半で展開されるヴィーツェンマンの歴史的啓示に関する議論は、メンデルスゾーンの啓示理解とも通底する部分がある。この点については、続く第二部において、『結末』での批判の内容を検討しながら、より詳細かつ包括的に検討していきたい。

※ ヤコービ、メンデルスゾーンからの引用は、以下の版に依拠し、引用箇所は略号、巻数、頁数によって示した。カントからの引用は、略号なしで巻数と頁数のみを表記した。

Friedrich Heinrich Jacobi, *Werke*, hrsg. von Klaus Hammacher und Walter Jaeschke, Hamburg 1998ff. (略号W)

Moses Mendelssohn, *Gesammelte Schriften: Jubiläumsausgabe*, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1929ff. (略号JubA)

Immanuel Kant, *Kant's gesammelte Schriften*, hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften.

本稿は科学研究費補助金(研究課題番号: 25770027)による研究成果の一部である。